科目区分　学校教育に関する科目　授業科目　小児保健

未就学児童に来校し協力いただいた小児保健の教育実践

担当教員　教育実践総合センター　加藤匡宏

1.授業の外観

学生は小児保健において、乳幼児から学童期(14 歳時)まで子どもを取り巻く社会の中で小児の心身両面の健康増進を図るために必要な対応を学習し、適切な救急救命処置法、子どもの異常や病気を早期発見できる視点を獲得することを目標としている。学生は、乳幼児の抱き方、衣服の着脱、食事の世話、排泄とおむつ交換、乳幼児の身体計測、生理機能の測定、心肺蘇生法、神経系の発達評価、事故と応急手当、歯の健康、認定こども園での環境衛生について学び、保育士としての実践力を身につける。本講義は保育士養成コースの必須科目であり、小児保健の内容は、小児の発達の理解、医学の基礎知識を教育教授する科目である。筆者は、保育士コースにおいて、小児期に発症発見されやすい疾患(知的障害、自閉症)などについても分野横断的に教育を実施した。受講生は幼児教育の学生 11 人と自由科目選択 5 人である。前者らは幼稚園教諭免許取得とともに、保育士資格を獲得することを目指している学生である。今回、0 歳児から修学前幼児および母親に来校いただき子どもの発達過程と母親の育児について講義を実施した。また、0 歳児を抱えた母親の心労と喜びについて実習型講義を実施した。本講義では、0 歳児が来所しない際には「こどもの保健」(教科書)を使用し、専門用語の定義、用語解説を実施した。実際の乳児と母親に来校いただくことによって、乳児の身の回りの危険回避能力を実習体験させることを目的とした。乳児来所日以外は、学生は、「こどもの保健」の解説を聞くという一方向性の講義形態となることが多かったが、学生が予習において解らない箇所はその都度質問を受け付けた。

2.授業の評価法

授業評価は学生からの無記名自由記載アンケートを回収した。また、Q：卒業時の到達目標である教育学部 DP1-4 のそれぞれについて，この授業の受講前と比較して向上したかについて．4 段階で自己評価した（1：向上していない，2：どちらかと言えば向上していない，3：どちらかと言えば向上した，4：向上した）

3.授業評価結果　学生全員 DP1-4 すべて”4”であった。

4.<u>地域社会を核とした教育と研究のつながり</u>

座学の知識では、乳児を扱うことはできない。乳児と幼児（特に、今回は 9 ヶ月、11 ヶ月乳児および 1 歳、3 歳、5 歳）に来所いただくことによって、認定こども園が入所させる最年少乳児に調乳、授乳、身体清潔などを実体験することや最年少の乳児を預けて働く女性（母親）から得られる情報は、認定子ども園を中心とする母子地域コミュニティに対する小児保健と乳幼児の発達の教育の核となる。また、母は教師（休職中）であり、教育の福利厚生について話を聞くことができた。これらは、小児保健(保育士対策講座)(医学書院)の内容を踏襲した地域社会からフィードバックされる教育であり、保育園待機児童について学生が興味を持ち、卒業研究のテーマとなりうる。

5.学生の感想　「母子手帳の発行についてよくわかった」「転倒、浴槽が危険であることがわかった」「身の回りにある幼児の危険物と危険回避が重要な課題であることが

よくわかった」「保育士としての仕事のイメージがわいた」「視聴覚教材を導入してほしい」「講義負担がなく楽であった」「母親の声は勉強になった」「アレルギー食について知りたい」「看護師資格をもつ母親から母子手帳の使用方法を教えていただき興味がもてた」「育児参加中心の講義で、他の人の意見をたくさん取り入れることができて、とてもいい経験になった」「対策に絶対の正解というのはない事は何となく感じていたことなので、それは、これから現場に出て実際にそういう場面に出会ったときに、少しでも意欲的に取り組んで経験を積んでいきた」「この授業の良かった点は、自分たちで生きた乳児をみる時間が多かったので、自分たちで納得のいかない点をしっかり議論することができた。また、自分たちで育児環境の問題や課題を見つける力が身についた。改善点は、新しい価値や議論していることが正しいのかの判断が分からないことである」「生きた乳児を通して自分なりの考えを出すことができた。病弱保育の現場情報の提供もあった。また、母親からの意見を聞くだけではなくて、育児の工夫を私たちがするべきだった」

6.まとめ

学生は、保育士資格は本コースを終了すれば取得できるが、こども園への採用試験対策を意識していた。小児保健という医学系科目について興味を保ちながら受講していたようである。筆者は、こども園採用試験に出題されそうな内容に特化するのではなく、こども園(特に病弱保育)で実際に役立つ乳児一般の知識を教育教授するようにつとめた。受講生が 18 歳であることから、保育士とは何をする仕事なのかの具体的モデルがわからない様子であり、乳児の特徴を観察するだけでも十分であるように思われた。受講者は小児栄養・先天性代謝異常(酵素欠損症)など小児医学の専門性の高い医学分野について十分な理解することは難しいようであり、暗記するしかないとわりきった考えかたをしていた。本講義は、医学の基礎知識のみならず、実際の保育の現場を教育教授することに重きをおいた。受講生において小児保健という科目の実感はつかめたが、理論の体系理解については不明である。成書の知識用語を明確に使用できるかどうかはわからない可能性が高いように思えた。また、乳児に来校いただき子育ての大変さ、不安と喜び、こども園の実態（えみかキッズへの申し込み方法）の教育を実施したことは、学生にとって新鮮な印象を与えたと思われる。小児保健は専門用語の定義が難しく、診断基準の提示に多くの時間を必要とした。学生たちの授業評価からは、実習参加による学びに対する評価が多かった。また、絶対の正解がないことにも、ある程度の理解を示してくれたと思う。ただ、もう少し、基本的な方向性は示す必要はあると思った。ただ、なによりも、主体的な学びが出来たこと、そのことに意義を見出してくれた学生が多くいた事に、授業者として強い喜びを感じた。毎回、乳幼児と母親に来所いただき講義を展開していたことが報われた可能性が高い。適切な事例呈示ができなかったことや解説のスピードが速すぎて、学生に疲労感を与えた可能性がある。さらに、深く突っ込んだ議論の必要性や資料の問題など、課題とされたことも考え合わせ、今後、より質の高い授業として展開したいと思う。